

【旧約聖書日課】出エジプト記 33章7～11節

7モーセは一つの天幕を取って、宿営の外、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった。8モーセが幕屋に出て行くときには、民は全員起立し、自分の天幕の入り口に立って、モーセが幕屋に入ってしまうまで見送った。9モーセが幕屋に入ると、雲の柱が降りて来て幕屋の入り口に立ち、主はモーセと語られた。10雲の柱が幕屋の入り口に立つのを見ると、民は全員起立し、おのおの自分の天幕の入り口で礼拝した。11主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセは宿営に戻ったが、彼の従者である若者、ヌンの子ヨシュアは幕屋から離れなかった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章28～39節

28神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

31では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができますか。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますか。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。38わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 16章25～33節

<sup>25</sup>「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。<sup>26</sup>その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。<sup>27</sup>父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。<sup>28</sup>わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」<sup>29</sup>弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。<sup>30</sup>あなたが何でもご存じて、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」<sup>31</sup>イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。<sup>32</sup>だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。<sup>33</sup>これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

### 「天の父よ」【こども説教のために】

死んで三日目にご復活なさって弟子たちの前に現れてくださった主イエスは、四十日間彼らと共にいてくださいましたが、いつまでもそうしているわけにはいきませんでした。天の御父のもとからお出でになられた方は、また、天の御父のもとに行かれるのです。

弟子たちを残して行かれる主イエスは、彼らにおっしゃいました、「**勇気を出しなさい**」と。なぜなら、弟子たちは、今や、主イエスが天の御父のもとからお出でになられた方だと知っているからです。去って行かれる主イエスが御父のもとに行かれるのを、知っているからです。主イエスを通して、天の御父を知っているからです。

わたしたちも、天の御父を知っています。主イエスを通して、知るようになされました。主イエスが、弟子たちの教会を通して、わたしたちのことも天の御父と結び付けてくださったのです。だから、わたしたちは、主イエスのことを直接知らなくても、安心して弟子たちのように、主イエスの名によって天の御父に願うのです、「天の父よ」と。

「祈るときには、こう言いなさい」(ルカ 11:2) と主イエスはお教えてくださいました、「**天におられるわたしたちの父よ (天にまします我らの父よ)**」(主の祈り)。そう口にするとき、わたしたちは、主イエスに従って、主イエスを通して、天の御父と共にいるようにされているのです。

## 「父が共にいてくださるから」

昨日、わたしは、一人の方のご葬儀に牧師として伴わせていただいできました。40年以上前に逝去された古い教会員のご家族で、96歳の女性です。ご本人は信者ではありませんでしたが、ご本人はじめご親族の多くが自由学園というキリスト教学校で学ばれた方たちで、聖書と讃美歌をもって天にお送りしたいと願われて、ご依頼くださったのです。火葬場での小さな祈りのみの葬儀でしたが、信者ではない方たちばかりにもかかわらず、皆さんが当たり前のように讃美歌を歌い、「天にまします我らの父よ」と主の祈りを唱えられていたのです。間違いなく、この方々も、主イエスを通して天の御父と共にいるようにされた一人ひとりなのでしょう。

今週の木曜日、教会暦は「昇天日」を迎えます。ご復活されて弟子たちの前に現れてくださった主イエスが、四十日共にいてくださった後に天に昇られたことを記念するのです。近年の習慣で、実際には次の「復活節」最後の主日に主の昇天を記念しますが、元来は、復活祭から四十日目の木曜日が祝日にも定められ記念されてきました。

主イエスは、弟子たちの前から去って行かれる方として記念されてきました。弟子たちから始まった教会は、主イエスとの別れを記念してきたのです。第一に、逮捕されて十字架につけられる主イエスを弟子たちが見捨てることによって起こった別れとして。第二に、ご復活された主イエスが弟子たちの見守る中を天に昇られることによって起こった別れとして。

第一の別れするとき、弟子たちは、主イエスを「ひとりきり」にしたのです。「死」へと引き出されて行く人を「ひとりきり」にしてしまいました。弟子たちにとって救いだったのは、主イエスご自身がそうなることをあらかじめご存じでいらして、弟子たちにお告げになられていたのです、「しかし、わたしはひとりではない。父が共にいてくださるからだ」と。そう聞かされていたからこそ、弟子たちは、ご復活の主を見る者とされました。御父が共にいてくださる方、御父のもとから来られて、再びそこに戻って行かれる方を見る者とされました。弟子たちも、御父が共にいてくださる者とされていたからです。彼らが見捨てて「ひとりきり」にしてしまった主イエスを、御父は死者の中からよみがえらせてくださって、もう一度、別れをやりなおさせてくださったのです。

わたしたちは、別れを避けて通るわけにはいきません。地上に生きる者である限り、すべての人と別れるときを迎えるのです。そのとき、天の御父と共にいるようにされた者として互いに別れを告げることができるならば、幸いなことです。ひとりではないからです。ひとりきりではないからです。天の御父と共にある者も互いに、御父のもとに行く者同士だからです。

## 《雲の柱》が降りるとき

わたしたちは、日曜日の教会へと導かれ、「天の父よ」と実際に声を合わせて祈る交わりに加えられています。「天にまします我らの父よ」と声を合わせるとき、わたしたちには、自分の唱える声を聴いてくれている人たちが与えられているのです。いいえ、たとえ自分の口がそう唱えられないときにも、代わって唱えて聴かせてくれる人たちが与えられているのです。

これが、どれほどの恵みか、大切なことか、わたしたちは、先達から教えられてきました。だからこそ、今、わたしたちの教会では、主日礼拝の中で二度も「主の祈り」を唱えるのです。子どもたちとも共に唱えたいからです、「天におられるわたしたちの父よ」と。

だから、日曜日の朝、この礼拝堂においでになれないとしても、離れた場所にあっても、ご一緒に唱えていただきたいのです、「天の父よ」と。主イエスを通して天の御父が共にいてくださることを知るようにされた一人として、声に出して唱えていただきたいのです、「天にまします我らの父よ」と。

主イエスと弟子たちの時代より千年以上前、モーセがイスラエルの民をエジプトから連れ出し、荒れ野を旅したとき、モーセは「臨在の幕屋」に入って主なる神の御前に立ちました。主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語ってくださったのです。そのとき、モーセが「臨在の幕屋」に入ると、雲の柱が幕屋の入口に立ったといいます。それは、主がモーセにお語りくださっていることを示すしるしでした。それを見ると、民は全員起立し、おのおの自分の天幕の入口で礼拝したのです。モーセと共にいてくださる主を、人々は、それぞれの場所にあつて共に憶えたのです。

「天の父よ」と唱えて祈る教会にも、「雲の柱」が立っているのではないのでしょうか。中にいる者には見えなくとも、教会の入口には、「雲の柱」が立っているのではないのでしょうか。それは、見る人が見れば分かる「雲の柱」です。「天の父よ」と唱えることを知っているものが見れば分かる「雲の柱」です。たとえ遠く離れたところにも、そこで立ち上がって、心を起立させて見上げるならば、わたしたちは「雲の柱」を見ることができましょう。わたしたち皆に「天の父よ」と唱えさせる「雲の柱」を見ることができましょう。

いいえ、どんなところにあつても、どんなときにも、見上げていただきたいのです。立ち上がって、心を起立させて、見上げていただきたいのです、「天の父よ」と唱える者たちの教会に降り立つ「雲の柱」を。主イエスはご存じです、「あなたがたには世で苦難がある」。その主イエスがおっしゃるのです、「しかし、勇気を出しなさい」と。そうです、わたしたち皆を御もとに抱いてくださる天の御父が、共にいてくださるのです。